

新村 菜央

本気でカンボジアに行きたいと思い出したのは1年ほど前のことだったか。大都会に住むようになって3年。東京という街はとても便利で密度が濃く、ソフトもハードも何もかもがとても大きな街である。ただその快適性、スピード感に慣れ過ぎてしまったため、自分自身の気持ちの許容量が小さくなってしまったと感じている。また、あらゆるものが目まぐるしく変わっていく街に住み、私の身近にも小さな、けれど私にとっては大きな変化が毎日のように起き、無情な社会も目に付いた。私は小さなことに苛立つ自分が嫌だったし、自分ではどうすることもできない社会の仕組みも嫌だった。そしてどうすればこの苛立ちから抜け出せるのかと考えてもいて、その答えのひとつが、カンボジアを訪問することであった。

ISSCの代表者である川島さんからは今までいろいろな話を伺っていた。そもそも彼と知り合ったきっかけが、ネット上での「カンボジアの孤児院への支援物資募集」の書き込みである。その1年ほど後、今度は「こんな団体を設立しました！」とISSCのパンフレットを見せてくださった。日頃そこまで親しくしていた間柄ではないが、カンボジアへの入れ込みようは断片的にでもとても強く伝わってきていた。ただでさえ多忙そうなのに、そこまで時間とお金をかけて入れ込めるモノ、そこまで人を夢中にさせるモノ、それがなんなのか、単純に見てみたいと思っていた。それを自分自身で見ることができたら、感じる事ができたら、少くくらい自分の器を広げることができるのではないかと思っていた。

カンボジアではふたつの孤児院への訪問とアンコール遺跡の見学を行った。そこでたくさんの子供たちに出会った。遺跡群の中で愛おしいほどに遅く、空へ真っ直ぐ伸びた大きな木々にも出会った。朝早くから市場にごった返す人々の姿も見た。そこでは全てが躍動感に溢れていて、みんなみんな地に足をつけてしっかりと生きている感じがした。生きることに素直な国だった。生きていることが生々しい国だった。それが日本よりもずっと健全な感じがした。日本のような先進国に暮らすことが悪いことだとは思わない。便利な毎日に感謝することもたくさんある。東京も嫌いではない。ただ、一生懸命でなくても生きられる世界に住んでいることで、生に対して鈍感になっているような気がする。恵まれていることが当たり前すぎて、そのことに気付かずに過ごしている人がどれほどいるだろうか。今という時間に生きているということ、それ自身を大切にしたい。カンボジア訪問後、少くくらいは人に優しくなれただろうか。「何が」と明言はできないものの、「何か」は確かに私の中に生まれた気がする。それを大切に、毎日を過ごしたいと思う。

孤児院での具体的な活動としては、米、文具、衣類等の支援と、子供たちとの交流プログラムの実施であった。交流プログラムは参加者が1人2～3種類ずつ考え、準備したもので、私は「わたあめづくり」「水鉄砲づくり」「ビーズ細工」の3つを行っ

た。異国の子供と交流するというのは初めての体験で、言葉のことはもちろん、文化も習慣も違う子供たちと楽しく過ごすことができるのかと、始めはそんな不安を抱いていた。が、実際には通訳をほとんど介さずに遂行できたプログラムもあったし、お互いを分かろうとする気持ちがあれば、ジェスチャーなどで結構何でも通じ合えるものだった。子供たちとの交流を通して感じたことは、カンボジアの子も日本の子と同じように個性豊かであること、国は違っても同じ人であるということ。私は現地に行くまで「カンボジアの子」「日本の子」と別々に考えていた。しかし元気な子もいれば大人しい子もいる。大雑把な子も几帳面な子も優しい子も恥ずかしがり屋の子も…日本の子供たちとどこも変わらない。それに気付いた時、「なんだ、一緒じゃない」と当たり前なことに気づけなかった自分が少しおかしかった。また、ツアー前の準備段階では子供たちと楽しく過ごせればいいと思っていたし、川島さんに「支援と交流は違うよ」言われた時もその違いを分かっているつもりでいた。しかし実際に孤児院を訪問してみると、私たちの訪問した後は一体何が残るのか、プログラムはこれで本当によかったのかと一種不安のようなものを感じるようになっていた。これだけだと私たちはただの「遊びに来てくれた日本人」で終わってしまうのではないか。初回の交流プログラムとしてはこれでよかったのかもしれない。ただ、次があるとしたらその時は、今回と全く同じではいけないと思う。「支援と交流は違うよ」という意味も、少しは理解できた気がする。

このツアーは孤児院のためのものではなく、私たち自身のためのものだった。私たちが何かを得るためのツアーだった。このような体験ができて心からよかったと思うし、機会があればまた参加したいとも考えている。

【オッダンパンの平和の子どもの家】

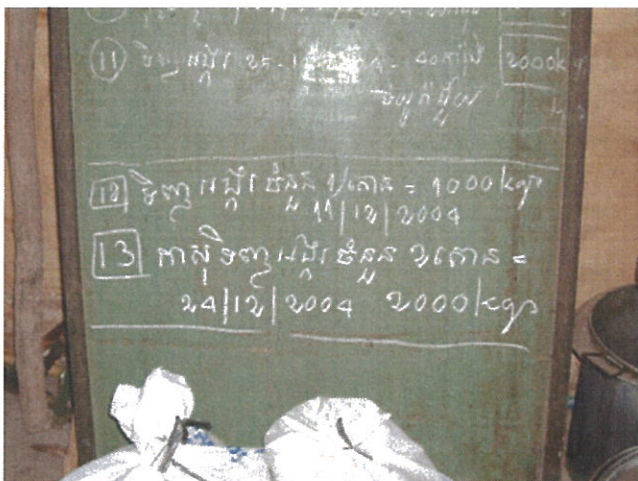


うどんづくりで顔に粉を付けた子供たち
カレールーの空箱を手にはめて



カレーづくり

【スレアンピルの平和の子どもの家】



13番が今回の支援物資（米 2,000kg）



支援物資の米（一部）



わたあめ機づくりの作業風景



わたあめを作っているところ



わたあめづくり



ペットボトルで水鉄砲づくり
男の子に人気



出来上がった水鉄砲で



水鉄砲を使ったリレーを行い、勝った
チームには賞品（ノートとペン）を



ビーズ細工



意外にも男の子にも好評



ブレスレットとネックレスを作成

【アンコール遺跡】

時の止まった遺跡群の中でたくましく成長している巨木たち

